

府障教ニュース

大阪府立障害児
学校教職員組合
大阪市天王寺区
東高津町7 11
府教育会館704号
(TEL)6765-8904
(FAX)6765-8905

青春を輝かせる光を生み出そう!!

青年期の教育権保障をあきらめない



講演する伊藤修毅さん

基調報告では、「全専研」会長の田中良三さんより、専攻科づくりの経緯から、全専研発足後の研究運動の展開などが報告されました。専攻科づくりの運動は、学校教育における後期中等教育の年限延長の保障を目的として保護者を中心に出発しました。そこには「どんなに障害があっても、高等部で終わらせることなく、もっと学びたい」という願いがありました。しかし、当面する高等部生徒の激増に追われる文科省や教育

12月3日、4日第13回全国専攻科特別ニーズ教育研究会(以下、全専研)IN大阪が開催されました。1日目は全体会が行われ、基調報告や青年の実践発表、講演がありました。2日目は、専攻科の教育実践や大学での学びと生涯学習の保障、専攻科づくりについてなどの分科会や、青年フォーラムが行われました。

専攻科づくり運動の到達点と課題

委員会には受け入れられず、かわりに福祉事業において受け入れられた経緯があります。

現在、専攻科を設置する特別支援学校等は全国で12校(私立10、国立1、その他1)あります。一方で福祉分野での自立訓練事業や就労移行支援事業等を活用した「福祉型専攻科」学びの作業所が急速に広がりを見せており、現在全国で34ヶ所になっています。田中さんは、「ここでの実践から、青年期に豊かな学びを保障することが人間的成長と社会参加・自立にとって非常に有効であり大切である」という確信を述べられ、講演内容にもつながる今後の課題についてもあげられました。

もっと学んで社会に出たい

各校青年たちの実践発表では、大きなホールでスポットを浴びて緊張しながらも、ダンスや俳句、パワーポイントでの自分たちの活動紹介などが披露されました。青年たちからは、好きなことや楽しいことだけでなく、本当はめんどくさいと思つてもあるといった本音も出ました。それでも発表からは、日ごろ仲間とともに奮闘しながら、自分と向き合い学んでいる様子が伝わってきました。



青年の発表

同年齢の市民と平等の青年期教育を

「青春輝く取り組みとは」と題して行われた、日本福祉大学の伊藤修毅さんの講演では、「障害者権利条約」の考え方をもち、教育権の保障や青年期教育にこだわる必要性が語られました。

伊藤さんは、教育年限延長を求める運動の展開としての学びの場は、学校教育法第1条に定める学校が設置したもので、特別支援学校高等部の専攻科など、それ以外のもの(福祉事業の活用や法定外大学など)があり、両者をきちんと分けて捉えておく必要があると強調しました。現状では福祉事業の活用等が数を上回っていますが、実践と事実の積み上げによって、やはり公立の知的障害特別支援学校高等部の専攻科設置を求め続ける必要があるのではないかと提起されました。

青年期は子どもから大人への歩みであり、それまでの様式を否定して新しい様式を再構築していく、大人への自づくりという紆余曲折の過程です。それを支えるための青年期教育が保障されているかを見直す必要があります。しかし、高等部卒業後の進路として、実質的に一般就労が福祉事業利用かの2択となっている現状があります。

伊藤さんは、後期中等教育の年限延長や高等教育の保障によって進路の選択肢を広げること、初等教育や中等教育の課題としてなお残っている、質の高い教育の課題へも大きく貢献するはずであると述べられました。最後に伊藤さんは、障害の有無に関わらず、果たして今の日本の社会でどのような青年期教育が保障されているのかといった疑問も投げかけられました。そして、障害のある青年の輝く青春を保障する取り組みが、世の中の青年みんなの青春を輝かせる光を生み出すことなのではないか、と締めくくられました。

書記局のひとりごと

松井知事らが旗を振り、2025年に「夢洲」に「万博」を誘致しようとする大阪府議会・大阪市の議会の決議案が可決しました。近い将来、南海トラフ地震の発生が確実視される中、大地震・大津波に耐えられない夢洲に、半年にわたって人を集中させようとするなど、あまりにも無謀な計画です。

知事らは「万博」とともに、「IR(カジノ)を含む統合リゾート」をセットで誘致し、大阪の「成長戦略」の切り札にしようとしています。しかし実際は、マカオもシンガポールもカジノの売り上げが落ち込んでおり、アメリカでも大規模IRの倒産が相次いでいます。仮に日本で解禁したからと言って、景気が良くなる保証はありません。

それどころか、新たな依存症患者を生み出すことで、かえって社会的コストの損失を招く恐れがあります。患者が推計536万人と言われるギャンブル依存症は、疾病であり、国内において確立した治療方法は無いと厚労省も国会で答弁しました。今求められているのは、これ以上患者を増やさないために、ギャンブルが有害であるとの情報を国民に提供する取り組みです。

11月16日に報道された「読売」の世論調査でも、万博会場の予定地の近くに、IRを誘致することに対して、「反対」の回答が52%に達し、「賛成」の33%を大きく上回りました。府民合意とは程遠い状況です。にもかかわらず、国会ではカジノを合法化する法案が自民・維新などの賛成多数により、12月6日の衆院本会議で強行可決されました。ギャンブル合法化という安倍政権の新たな大暴走が始まっています。

列車に乗って旅をしたい!

第32回「大阪ひまわり号」に参加して

「列車に乗って旅をしたい」という障害者の切実な願いを実現させようと、1982年に多くの困難を乗り越えて専用列車を走らせたのがひまわり号運動の始まりでした。10月23日、今年32回目となる「大阪ひまわり号」に参加してきました。

お土産物屋さんをのぞいて自由に買い物をするのも、ひまわり号参加者の楽しみの一つとなっています。皆さん自由時間を有意義に過ごせました。

時を過ごすことができました。以前は保護者と一緒に参加する人が多かったのですが、今回はヘルパーさんと一緒に参加する人を多く見かけたのが印象的でした。また、今年も「ぼろスクエア」や青年当事者の会などの若い人たちが実行委員会に参加して、当日のボランティアまで担って

いただいたお陰で、スムーズな運営ができました。「ひまわり号憲章」には、「ひまわり号」に集う仲間たちひとりひとりが主人公となり、ロマン、ドラマに満ちた旅を満喫しあおう。すべての障害者が自らの力で安全に、そして自由に利用できる駅づくり、ターミナルづくり、交通体

系は是正と整備を促進させよう」と記されています。こうした趣旨に基づき、参加者への配布資料の中には、市営交通の発展を求めます「介護・福祉・医療サービスにおける利用者負担等の撤廃」などの署名用紙を同封して、実行委員長より署名の訴えも行いました。

今年も多くの人たちの協力を得て、第32回大阪ひまわり号のとりくみを無事終えることができました。障害者の要求実現という視点から出発した、ひまわり号運動には、これからも、平和を願い、すべての人がいつでも、だれでも、どこへでも安心して利用できる交通のしくみと、安心して住み続けられる、まちづくりをめざしたとりくみが求められます。(障対部：鶴岡敬三)



車掌さんになりました!

「大阪ひまわり号」当日の8時44分、180名を乗せた近鉄電車あおぞら号は上本町駅を出発して松阪駅に向かいました。途中、恒例となっている、走れ!ひまわり号俺たちのシルクロードの歌声で車内は大いに盛り上がり、参加者が車掌さんに扮して行う「切符切り」の企画も好評でした。

曇り空で肌寒い生憎のお天気でしたが、実行委員会の企画によるスタンプリングでは、素敵な景品を手にした参加者がとても嬉しそうでした。四季折々の植物が楽しめるイングリッシュガーデンで、バラが咲き誇る景色をのんびり楽しむ人や、ガーデンカフェで季節の手作りジェラートを楽しむ人もいました。

何十年ぶりかに参加した「ひまわり号」でしたが、昔の卒業生に久しぶりに再会でき、新しい出会いもあって楽しい

「ぼろスクエア」や青年当事者の会などの若い人たちが実行委員会に参加して、当日のボランティアまで担って

して自由に利用できる駅づくり、ターミナルづくり、交通体

系は是正と整備を促進させよう」と記されています。こうした趣旨に基づき、参加者への配布資料の中には、市営交通の発展を求めます「介護・福祉・医療サービスにおける利用者負担等の撤廃」などの署名用紙を同封して、実行委員長より署名の訴えも行いました。

今年も多くの人たちの協力を得て、第32回大阪ひまわり号のとりくみを無事終えることができました。障害者の要求実現という視点から出発した、ひまわり号運動には、これからも、平和を願い、すべての人がいつでも、だれでも、どこへでも安心して利用できる交通のしくみと、安心して住み続けられる、まちづくりをめざしたとりくみが求められます。(障対部：鶴岡敬三)

松阪駅から松阪農業公園へルファームまではバスに乗り換えて移動し、到着後は松阪市のマスコミキャラクター「ちゃちゃも」に出迎えられ、大きな広場を使っての昼食となりました。昼食には三重県立相可高校食物調理科の卒業生が中心となって、お惣菜お弁当の製造販売を行うお店からの、心のこもったお弁当を美味しくいただきました。



近鉄特急あおぞら号

先輩に聞こう!

Vol.14

今までたくさんの学習会に参加して知識や交流を得てきました。周りにも伝えたいのですが、どうすればいいですか? 水野萌由 (泉南支援学校分会) 9年目

私も支援学校に転勤してきて真っ先に行ったのが、教材集めと教材作りです。これは教師として当たり前の仕事なのですが、最近は他の業務が忙しすぎて、授業準備の時間すら取れないのが厳しいですね。また、私は障がい児教育について専門的な知識や経験が皆無のままの転勤だったので、学習会などに積極的に参加し、新しいことを見いだせるように心がけてきました。とりわけ毎年1月に行われる「全国障害児学校・学級学習交流集会」の場は、大変視野が広がりますね。

ご質問の「どうやって周りにも伝えていくか」について、私がこれまでとりくんだことや、考えているのは次のようなものです。

- 校内の研修や授業交流会で自校や地域の先生方にも伝える。
- これまで、自分の授業VTRや教材を見ていただいたりしてきました。
- 教材のライブラリー化
- ひと目で学校に今こんな教材があるとわかるように、リストや教材全体を管理するシステムができるといいですね。
- 青年の学習会を定期的に行う
- これまでにも青年部では連続講座等をやっていたりしていますが、このような学習会が各職場や地域での取り組みとして青年部活動の柱となっていくといいですね。
- 生徒たちが瞳を輝かせる授業をめざして、これからもみんなで奮闘していきましょう。

(山岡充子 寝屋川支援学校分会 35年目)